



『野里地区』をたずねて

野里地区は姫路城の北東に位置し、ほぼ野里小学校区と水上小学校区の一部にわたる地域をさす。野里は『播磨国風土記』の「大野里」の故地とされ、平安時代からは大野郷に含まれ、戦国時代までに野里村が形成される。天正6年(1578)野里村宛の羽柴秀吉禁制が残るが、秀吉時代の姫路城は東の野里方面に大手があったという説もある。

関ヶ原の戦後、姫路に入封した池田輝政の姫路城下建設により、野里村の南部は外濠の内では城下町となり、野里街道沿いが外曲輪周辺に広がる外町、それ以外は村方となる。明治5年に野里村と野里町となり、明治22年野里村は水上村の大字となり、野里町は姫路市に編入。昭和8年旧野里村を含む水上村も姫路市に編入された。

野里は江戸時代まで鋳物業の盛んな地域で知られ、千種鉄を素材とする播磨鍋はすでに平安時代に都に名高い播磨の名産であり、室町時代になると野里鍋として都の貴顕の贈答品として記録(蔭涼軒日録)に残る。戦国時代には芥田五郎右衛門が鋳物師の棟梁として現れ、永禄11年(1568)赤松義祐から播磨国中鋳物師総管職を安堵された。慶長19年(1614)芥田家は播磨鋳物師の総棟梁として野里鋳物師を中心に167人を率いて上洛、京都方広寺の鐘製造にたずさわっており、野里鋳物師の最盛期といわれる。

旧姫路城下町は昭和20年7月の空襲で大部分が焼失したが、ここ野里地区と船場地区は幸いに戦災を免れて古い町並みと町家遺構が多く残っていた。『姫路市史』第15巻下に町家遺構の調査が掲載されているが、改築や空家が目立ってきたなかで、工夫を凝らした町家の再生や活用への取り組みも始まっている。



旧野里街道沿いの町家
(再生活用をはかる大野家住宅)



誓光寺・願入寺



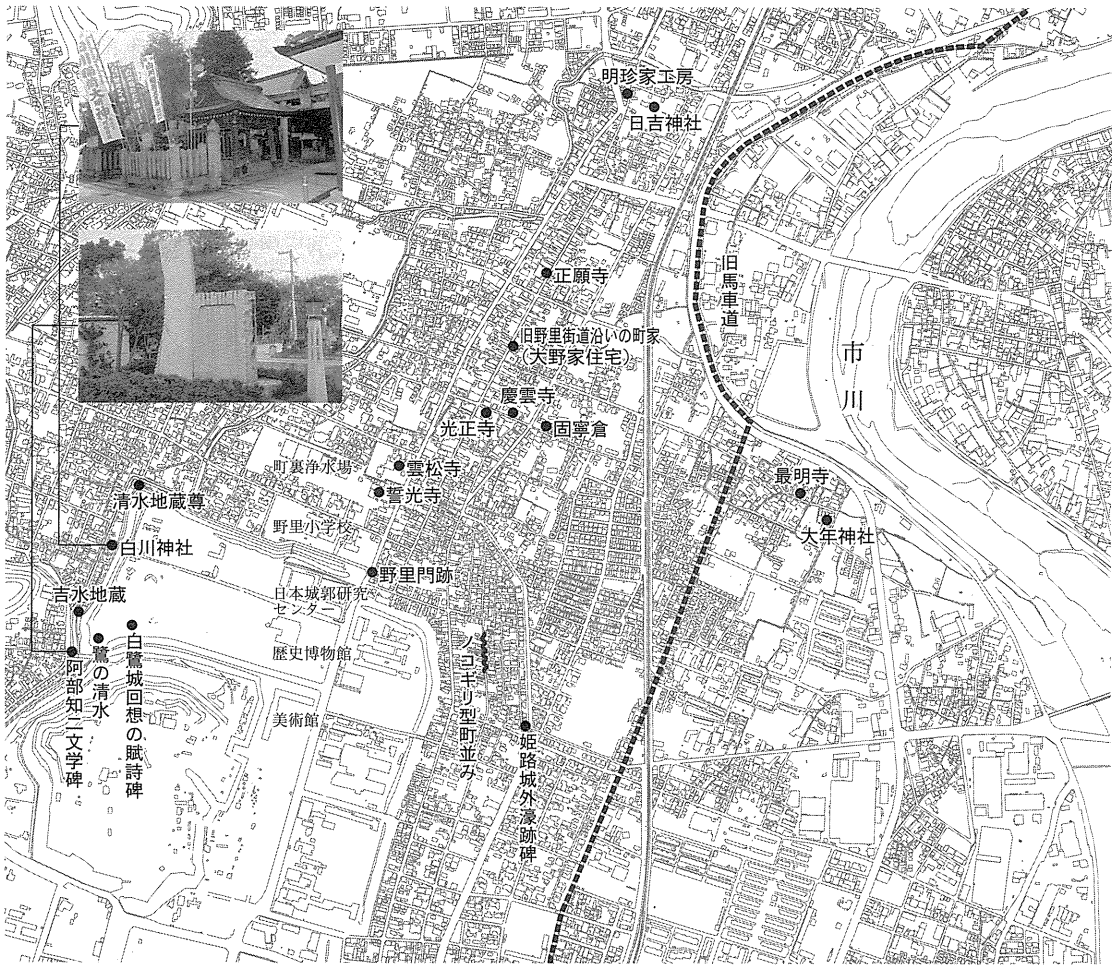
庚申堂

誓光寺 (河間町) 天正5年(1577)創建という。浄土宗。地藏堂の前に、小型のくりぬき石棺仏が安置されている。中央部を光背形に彫りくぼめた中に、左手に宝珠、右手に錫杖をもつ地藏立像で高さ41cm。凝灰岩製。貞治2年(1363)造立。この石棺仏は、願入寺の子安地藏として厚い信仰を受けていたもの。墓地には、石柱の上部に六体の地藏像を彫った石幢がある。笠が欠け、塔身のみ残るが室町時代のもものと推定される。

願入寺 (河間町) 治承3年(1179)幽玄の開基といわれる古刹である。浄土宗。もとは姫山の麓にあって宿村と国府寺村の境界に位置していたので宿分院ともいわれた。池田輝政の城下建設に際して坂田町(現北条口四丁目)へ移転。戦災により戦後は誓光寺に移る。

庚申堂 (河間町) 誓光寺の門前に位置している。本尊は青面金剛童子。この堂は姫路城の鬼門を守護しているものともいい、魚町の西福寺にあった庚申堂は城の裏鬼門にあたっていたともいう。

武家屋敷 坊主町・同心町・五郎右衛門邸などにみられた数軒の武家屋敷はL字型またはT字型の主屋でもとは草葺き。改築等が進み往時の姿はほとんど見られなくなったが『姫路市史』第15巻下に調査報告を掲載している。



雲松寺本堂



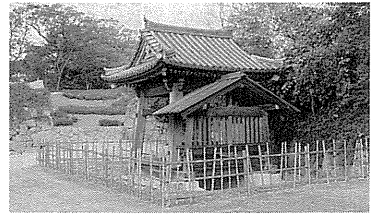
香雪園碑

雲松寺（河間町） 播磨における黄檗宗の拠点であった。開基とされる安珪は臨済宗興国派であったが、寛文6年（1666）中興開山の実伝のとき黄檗宗となった。境内に山王堂があるのは、もとは天台宗の随願寺の末寺曼陀羅寺の後身で、威徳寺町にあったものが城下建設の際に現在地に移ったという伝承と関連があるものか。本堂は木札から宝暦元年（1751）建立、万福寺大雄宝殿の形式に共通するものがある。扁額は隠元禅師の揮毫。旧禅堂の位牌堂は瓦銘から宝永四年（1707）建立。鐘楼門は18世紀中頃の建築で扁額は実伝の師木庵の揮毫。境内には承応2年（1653）の五輪塔、享保5年（1720）の六十六部供養塔のほか、姫路藩家老高須隼人家の庭園（香雪園）から移設された文久元年（1861）の香雪園碑がある。

白川神社（坊主町） 社伝によると寛延2年（1749）酒井忠恭が前橋から入封のとき、白川稲荷大明神を雲戸大神に隣接して祀るとあり、主神を蒼稻魂神とする。城の乾（西北）に鎮座し歴代城主の崇敬が厚かった。神紋は酒井家紋の劍酢^{うがのみたまのかみ}の中央に稲荷の玉を配する。吉水地蔵北方にあった煙硝蔵が爆発したとき、眼を悪くした人々が当社御神徳で回復したといい、以来眼の神様として信仰されている。

野里小学校（坊主町） 明治12年（1879）城東小学校分教場が鍛冶町に設立され、野里における初の近代小学校施設である。明治34年（1901）には野里尋常小学校が開校した。

吉水地蔵（坊主町） 大正期の建立という。この辺は清い伏流水に恵まれ、かつては洗濯場になっていたという。少し南に中曲輪を囲む土塁に設けられていた清水門跡があり、昭和63年の発掘調査で桁形遺構の東南部に17世紀以降の石組み・幕末の井戸枠の木組をもつ井戸が発見された。戦国時代に赤松義村の定めたといい、播磨十水の一つ「鷺の清水」であると推定される。井戸まわりの礎石から推定された覆い屋が復元されている。



鷺の清水

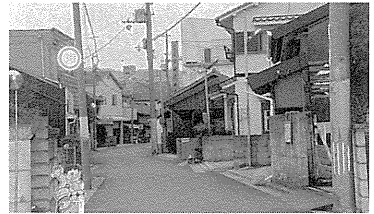
姫路城外濠跡碑（五郎右衛門邸） 姫路城の外濠は、清水門から南下して、十二所神社裏手より東へ曲がり、北条門より北上して竹の門に至り、ここから西に折れ約200mでさらに北上して野里堀留町に至っている。延長5232mという。大半は埋め立てられているが、竹の門の西方から北の濠端までは幅約2mの水路を残して埋め立てて公道としている。郷土出身の清水公照（元東大寺管長）揮毫の記念碑が建つ。



吉水地蔵

外濠跡碑

ノコギリ型町並み 金屋町・八木町・福居町・橋之町・福本町・米屋町などで家屋が道に対して斜めに建ち、隣家の間に小三角状の空き地を生じ、町並みがノコギリ状に斜向して形成された。家屋改築が進んで敷地形状に名残を止め、わかりにくいところもある。形成の理由は軍事説・地割説・方位説などがあり、はっきりしない。



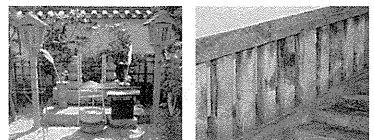
ノコギリ型町並み

慶雲寺（野里慶雲寺前町） 嘉吉3年（1443）創建でもとは天台宗といい、天正5年（1577）南室和尚が中興して臨済宗妙心寺派となった。南室和尚に帰依した池田輝政は姫路城築城のさいの木材を寄進し本堂が再建されたという。所蔵の絹本着色宗夢童子像と紙本墨画大応大燈関山像は市指定文化財、旧国宝の金堂如意輪観音像は輝政正室の督姫（徳川家康娘）が念持仏を寄進したものといい、光正寺の本尊であった。境内には昭和26年光正寺から移設された「お夏・清十郎比翼塚」があり、8月9日はお夏・清十郎比翼塚顕彰会、地域住民によるお夏清十郎祭りで賑わう。



慶雲寺

光正寺（野里慶雲寺前町） もとは慶雲寺の塔頭で、現在は観音堂として南西に位置している。慶雲寺中興開山の南室和尚は播磨西国三十三番札所の創始者で、ここは五番札所に定められた。西鶴・近松以来「お夏清十郎物」は文芸史上名高い悲恋の代名詞となり、境内の階段玉垣には幕末の頃の歌舞伎・浄瑠璃関係者の名がみえる。



比翼塚

光正寺 玉垣

固寧倉（野里慶雲寺前町） 酒井家は領民に賦課した社倉麦代銀を困窮した村に低利貸付を行う社倉法を前橋以来行っていたが、備荒貯蓄のための倉庫設営を町村組大庄屋らが家老河合寸翁に建議し、文化6年（1809）頃から実施をみた。各村からの創設願により1ヶ村または2、3ヶ村に1ヶ所の割合で設置され、弘化3年（1846）までに藩内288ヶ所を数えた。固寧の語は幕府儒者林述斎が『書経』から選び、述斎の子檀宇揮毫の扁額が正面に掲げられた。天保14年（1843）の記録に南八代・北八代・野里村3ヶ村の固寧倉がみえるが、教育委員会が保管している野里固寧倉扁額の裏面墨書から嘉永6年（1853）野里村一村の固寧倉が建立されたことがわかる。固寧倉は刀出・野里・東山・白浜・妻鹿の5ヶ所に現存し市指定文化財。

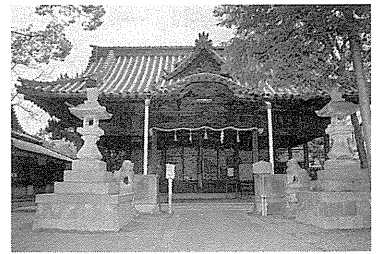


光正寺



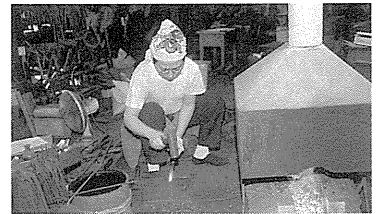
野里の固寧倉

日吉神社（野里） 承和元年（834）随願寺の鎮守として比叡山の山王神社から勧請されたといひ、山王権現と称した。天正の兵火（別所長治の侵攻）で焼失、池田輝政の時代に再建され雲松寺の鎮守になったという。境内には寛政9年（1797）の狛犬一対、弘化3年（1846）の常夜灯一対、「右たしま（但馬） 左ひろみ祢（広峯）」と刻銘された道標がある。明治元年（1868）日吉神社と改称。

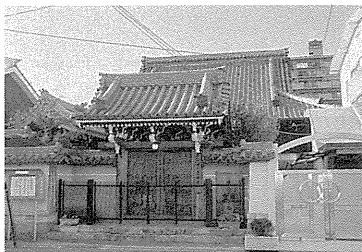


日吉神社

明珍家 平安時代以来甲冑匠として名高い明珍家は江戸時代には各地の大家に出仕している。姫路の明珍家は前橋の酒井家に仕え、寛延2年（1749）酒井家の入封とともに野里に居を構えた。時代とともに使用する鉄素材や製作する鉄製品に変遷はあるが、絶妙な鉄の焼き加減・打ち加減の鍛造法と甲冑技術独自の着色法という伝統技術の本質を確固として継承している。現在主として普通鋼を用いるが古来のたたら製鉄で作られる玉鋼たまがねや最新のチタンも鍛造し、火箸・風鈴・花器などを製作しており、明珍火箸は兵庫県伝統的工芸品。明珍家工房は現在旧野里街道をはさんで日吉神社の西側（伊伝居）にある。



明珍家の技術継承



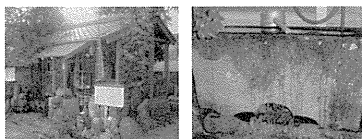
正願寺

正願寺（威徳寺町） 開基は教念法師で天正9年（1581）創建といひ真宗大谷派。一説には天正8年（1580）羽柴秀吉により三木城が落城し避難してきた人々により威徳寺跡に建立されたという。威徳寺は室町時代の応永年間に建立されたと推定され応永22年（1415）国衙領内の田畑屋敷が寄進されている。元龜元年（1570）威徳寺住持と井出村の紛争があり、天正年間までに小寺氏との対立から衰退したとみられている。



大年神社

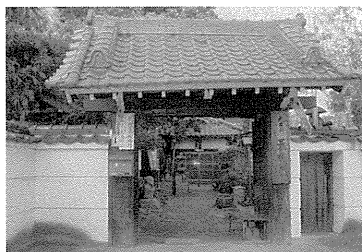
大年神社（野里） 創建は不詳だが、北条時頼廻国伝説にかかわり大日山最明寺とともに再興して鎮守とされたという。天正の兵火で焼失したが池田輝政が野里村寺社領の除地を認め、徳川家光が慶雲寺領とともに朱印地とし、その頃から慶雲寺の鎮守となった。江戸時代は代々芥田五郎右衛門家が支配役として大歳大明神に奉仕し、秋祭りには藤本孔雀太夫の能と巫女神楽が奉納されたという。境内には延宝4年（1676）・正徳元年（1711）・享保18年（1733）・宝暦9年（1759）・嘉永2年（1849）の石燈籠、正徳2年（1712）手洗石、文久2年（1862）狛犬・慶応3年（1867）石鳥居など石造品が多く残る。



修因地藏

最明寺 手洗石

最明寺（野里） 法道仙人の開基伝承をもつ。高野山真言宗。鎌倉幕府執権北条時頼が再建したといひ寺名は時頼出家後の号「最明寺入道覚了房道崇」にちなむという。室町時代の作とされる謡曲「鉢の木」で著名な佐野源左衛門終焉の地という。佐野源左衛門尉常民は上野佐野庄（群馬県高崎市）ゆかりの鎌倉御家人とされる。佐野は天命鑄物で著名な地であり天命の鑄物師は方広寺鐘の鑄造にも参加しており、野里鑄物師との交流を考える必要もある。



最明寺

最明寺はかつて八丁四方の境内に塔頭諸坊があったというが、現本堂は塔頭の薬王院の建物という。境内には寛延元年（1748）の手洗石、市川川原刑場の刑死者を弔う供養塔や修因地藏がある。